
イレギュラーな魔術師

弥本宇斗華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イレギュラーな魔術師

【Nコード】

N1356S

【作者名】

弥本宇斗華

【あらすじ】

エリート魔術師の一家の落ちこぼれの次男坊で、家族に捨てられて親戚に引き取られ、魔術師として大成し、故郷のエリート魔術師を養成する高校の『落第した落ちこぼれが集まる』といわれる普通科に編入した、星野浩明による巻き込まれ系魔法バトル物です。自身初のオリジナル一次創作ものですので温かい目で見ていただけると嬉しいです。

プロローグ1（前書き）

自身初のオリジナルです。

今までのギャグ物ではなく、新しいジャンルの挑戦です！

プロローグ1

午前零時を過ぎた人気が全くない繁華街、その一歩はずれた地方銀行の裏口でこそこそと動く男の影があった。

サングラスをかけて帽子を深くかかって顔を隠し、全身黒づくめで大きめのシヨルダーバッグを抱えたその姿は彼が銀行の関係者ではなく強盗目的だと分かった。

「暗証番号は……っと」

男がボタンを押し終わると機械的な音がロックの解除を知らせた。調査済みとはいえ、あまりにもお粗末なセキュリティに男は半ば呆れながらなかに侵入した。

「金庫は……」

暗闇のなか、片手に持った懐中電灯を片手につきあたりの金庫室に移動し、次の解除作業に移るために金庫の扉の前にしゃがみこんだ。

ここからが本番だ。

気合いを入れ直して金庫に向かうと扉に耳をあて、ダイヤルに手をかけてまわし始めた。

暗闇のなか、わずかな音の違いを聞き分けていき。

「これで……よしっと」

重い金属音の音と共に開いていく扉に軽い達成感を得たその時だった。

暗闇に包まれた室内に、明かりが灯された。

「な、何だ!？」

突然の出来事に慌てて立ち上がりあたりを見回すと

「はい、チーズ」

気の抜けたような軽い声の後に、デジカメのシャッターを切る音が室内に響いた。

人間を『トラブルを起こす側』と『トラブルに巻き込まれる側』
とで分けるとしたら、この物語の主人公である星野浩明は間違いな
く『巻き込まれる側』だろう。

彼はとにかくトラブルに巻き込まれ、更に人から何かを頼まれる
と断れない水呑み馬である。

兄に頼まれて、コンビニに買い物（ビールと大福）で帰るという組
み合わせだよ）に行った帰り道、早く帰ろうと裏道に入ると、男が
銀行のセキュリティを解除して中に入るといふ場面に出くわしてし
まい、放っておく訳にもいかず、

「くそッ」

吐き捨てるように言いながら、男が奥に行ったのを確認して中に
入り、更に金庫を開けているのを確認すると、持っていたサングラ
ス（変装用に）をかけ、証拠を押さえるためのデジカメ（たまたま
持っていただけで、盗撮目的ではない）を取り出して、室内灯をつ
けた、

「はい、チーズ！」

室内灯がついたことに驚いて金庫の前から立ち上がった男に向け
て、浩明はデジカメのシャッターをきった。

「参ったねえ、おつかいの帰り道にまさか銀行強盗に出くわしちゃ
うなんて……」

事態が分からず狐に包まれたように呆気にとられている男の前に、
浩明はやきながらはデジカメを上着のポケットにしまった。

「だ、誰だ!？」

「誰って……答える必要ある?」

間抜け面をさらしていた男が、慌てて醜態を取り繕うように威圧
してくるといふ小物っぷりを見ながら、呆れて笑みをこぼして煽る
ように言い返した。

「あえて言うなら……正義の味方かな？」

「ふざけんな!」

分かりやすい奴だねえ……

虚勢を張り続ける男を更に煽るも、次に男が取った行動に浩明の楽観が吹き飛んだ。

「何だよ。魔術師かよ……」

余計な仕事が増えたな

浩明の顔から笑みが消え、ため息をついてから構えた。

近未来。科学技術の発展により、アニメやおとぎ話でしか出てこなかった『魔法』という空想の産物は、科学者の研究により現実世界にもたらされる事となった。

科学者達の長年の研究の結果、人間の体内には魔力を持つ人種が存在する事が発見され、更に訓練次第では自由に魔法が使えるようになる」と発表し、それにより魔法教育の発達を促す事となった。

しかし、こうして『魔術師』と呼ばれる人間が生まれた結果、それは世界に大きな波紋を生み出した。

『ありえない事を可能にする、それが魔術師であり魔法である』その定義によってもたらされた世界は、新たな秩序を作り、多くの混乱をもたらした。

一部の魔術師は魔法による犯罪を生み、世界に新たなる災いをもたらす事となったのである。

予想通りコンバーターを装着させたら相手の表情が一変した。

「何だよ。魔術師かよ……」

どうやら相手はコンバーターを着ける様子はない。つまり、『魔術師ではない』という事になる。

勝ったな

男が笑みを浮かべて詠唱を唱え、両腕を前に構えた。浩明が構える様子もなく、ため息をもらしていた。

「馬鹿なヤツだ。力のない人間が正義を振りかざした事を後悔させてやる」

男が詠唱を終えると、男の前には十本の氷の槍が構築された。

アイスニードル

冰雪系魔法の中でも比較的中位に位置する魔法で、一度に十本放てれば1人前の魔術師とされる

「どうだ、これだけの槍を見た事あるか？」

未だにため息をもらし、怯えたように見ていた男を挑発した。

「どうだ、これだけの槍を見た事あるか？」

十本の氷の槍を浩明に向け、男は浩明を見下すような下品な笑みを浮かべて言った。

どうしようかな……

浩明は心底めんどくさそうに、しかし、楽しみまじりに男を見た。実力はだいたい分かったが、己の手の内は晒したくはないし、何より反撃して室内を荒らすのは気がひける……。

「どうした？　びびったか、三下？」

どう対処するか思案していると、男は浩明を更に挑発してきた。

どん底に叩き落とすか

男の一言に、浩明はそう決めた。

「いやあ、室内を荒らさずにどうやって片付けようかと思ってね」

「何だと！？　き、貴様！」

相手の油断を誘うよう煽ると、男は浩明の目論見通りに逆上し、

「死ねええエエー……！！」

男の掛け声とともに、自分の作ったアイスニードルの一本を浩明

に向けて放った。

「死ねええエエー！！！」

これで終わりだ

浩明に対してアイスニードルを放った。

それは、浩明に刺さって終わり……のはずだった。

「なっ……」

男の表情が凍り付いた。相手は、自分の放ったアイスニードルを素手ではじき飛ばしたのだから。

魔術師とそうでない者との戦いは、圧倒的に魔術師に有利である。『攻撃魔法に対しての反撃の方法がない』からだ。

そして、魔術師の戦い方は己のなかにある魔力を魔法として発動するためには、己の魔力をコンバーターによって変換し、口頭による詠唱によって、はじめて魔法として使うことができる。

つまり、魔法の発動にはコンバーターと数十秒の時間が必要になる。

すなわち、コンバーターもつけていないただの一般人が、何のそぶりもなく魔術師の放った魔法に対して反撃をしたのである。

「な、何なんだお前は！ いったい何をした!？」

目の前で起こったことが信じられず、パニック寸前の男はようやく出すことのできた疑問を浩明にぶつける。

「何をつて、君の見た通りの事をしたただだよ」

「ふざけるな！ 仮に貴様が魔術師だったとしてもコンバーターも詠唱もしてないのに魔法を放つなんてありえるわけが」

浩明の言葉にまくしたたて否定しようとしたが

「『ありえない事を可能にする それが魔術師であり魔法である』
じゃなかった？」

「……」

それを、遮って浩明が言った言葉に、男は黙り込んだ。

「なんなんだ、この男は!？」

自慢の魔法を、あり得ないやり方で防御され、未だ手の内を明かさないう浩明に、男の心は恐怖という感情に支配され始めていた。

「さてと……、まだやる？　アイスニードルを解除して、おとなしく引き上げるなら見逃してあげるけど」

腕を組んで自分を見下すように見ていた浩明の、降伏を勧告された瞬間、

「う……うわああああー!!」

感情を抑えきれなくなった男は、残っていた氷の槍を一齐に浩明に向けて放った。

氷の槍によってお互いの視界が遮られたのを確認してから、浩明は腕を使い、自分の前に等身大の光の壁を作り、アイスニードルを防いだ。

男の放った氷の槍をミラーバリアでなんなく防ぎきると、男の行動に感心した。

ミラーバリア

指先から己の魔力を放ち、それを大気中に形成させて光のバリアを作る、浩明が得意とする防御魔法である。

「逃げたか……」

遮られていた視界が開けると、そこにはさっきまでいた男の姿がなく、代わりに壁に大きな穴が出来ていた。

相手さんも馬鹿じゃないみたいだね

自分がかかわないとみるや即座に逃走するという、とっさの判断に浩明は感心すると、

「鬼ごっここときますか」

子供が無邪気に遊ぶように笑みを浮かべると、男の開けた穴から

外に出たのだった。

プロローグ1（後書き）

感想やご意見をお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1356s/>

イレギュラーな魔術師

2011年4月9日20時55分発行